

「代名態」の役割

渡 瀬 嘉 朗

I-1 「主辞」機能について

Fonction sujet (「主辞」機能と訳しておこう) を規定している最も重要な特徴は、やはり、そのような機能を与えられる文中の参加者の表現が、必ず表現されなくてはならない項であるという点であろう。この、文中に「かならず表現されなくてはならない」という特性は、いかにも形にのみとらわれた規定のように見えるが、さにあらず、この特性は実はこの機能の内容を何よりもはっきり規定してくれる。

その問題に入る前に、この項は、必ず表現されなければならないというが、その項を埋める要素については実は全く制限がない点を思い起こしておこう。話者は限りなく多くの要素の中からその要素を選ぶことになる。わかりやすくいえば話者は実に様々な名詞表現の中から「主辞」機能を担う要素をえらぶことになる。その要素の情報量は、だからきわめて高い¹⁾。

だが一方、その項は、それを構成するものが何であろうとかならず文中に「現れ」なくてはならない。その場合、項を埋める要素は何でもよいわけであるから項の選択の問題は脇に於ておいてよいし、また要素の情報量の問題も脇に置いておいてよい。項の内容の問題はさておきこの項が何らかの形で存在することが是非、必要だ、それがあらわれない限りその文は「文」として成立しない、というのである。そのような形でその項を必要としているのは、いわゆる動詞述部²⁾である。述部が *prédictat nominal* (名詞述部: たとえば "il y a + 名詞表現") になればこの項の必要——「文」を成立させるための必要——はなくなる。だからこの必要を生じせしめているのは動詞述部とその項のあいだの関係ということになる。しかし一方では、どうしても表現しなくてはならない関係には、情報がない。だからこの項と動詞述部とのあいだの関係、話者がどうしても表現してなくてはならない関係は、実は、情報量ゼロの関係なのである。

ここに「主辞」機能の最も大きな特徴が現れている。「主辞」機能とは今、上で見た二つの項の間の、情報量ゼロの関係なのである。裏返して言えば、話者は二つの項を文中で示すだけでよい。二つの項の間の関係をくどくどと述べる必要はない。動詞述部が選ばれば、そのときに問題の項との間の関係も決まってしまう。つまり動詞述部の選択とこの関係の決定のあいだ

1) ここでは「情報」を、そこで「いわれなかったこと」の総体——選択はできたにもかかわらず、実際には選択されなかったことの全て——と理解しておく。

2) ここでは現代フランス語の動詞述部を考える。

には「内含」関係 (implication) がある。動詞述部が我々に伝える情報の中にこの関係はあらかじめ含まれている、ということである。

しかし、もともと動詞述部はそれ以外にも多くの項とのあいだの関係を想定していて、そのように想定された諸関係の総和のうえに一つ一つの動詞述部の意味内容は成立していると考えられる。だから動詞述部がそれを想定しているという意味では、あの関係もこの関係も、全く同じなのだ。では「主辞」機能と、その他の様々な統辞機能の違いは何だろうか。

動詞述部が想定している様々な項とのあいだの関係は多々あるが、その中で、無条件に、説明なしで理解しなくてはならない関係が一つある。それがこの、問題の関係、「主辞」機能であるということになる。他の関係には、何らかの目印が要る。それがないと動詞述部の中の意味特性のどの部分との関係が問われるのか、さっぱりわからなくなる。もともと、動詞述部が想定している関係ではあるが、複数の関係のあいだで一種の交通整理のようなものが、どうしても必要になってくるのである。「主辞」機能にはそのような目印の必要がない。目印があってもよいが、機能的には飾りであり、完全に *redundant* である。だから、「主辞」機能がその言語にはっきりと成立すれば、この飾りの目印はいつでも姿を消してよいことになる³⁾。

以上で「主辞」機能がきわめて特権的な地位を確保した統辞機能であることがわかるが、その内実と、「主辞」機能をあたえられる問題の項が文中に「必ず表現されなくてはならない」という事実の間の切っても切れない関係はあきらかであろう。

動詞述部がさまざまな参加者との関係を想定しつつその意味内容を構築していくことはどの言語にも見られる事実であるが、それは動詞述部がきまって文の中の諸関係の収斂点として定義されるものである以上、当然の帰結であるといえよう。もっとも、その中の一つの関係が特権的な関係として決まってくる場合でも、必ずしもそれが以上で見た *complément obligatoire* としての「主辞」機能の姿を必ずとるとは決まっていない。このことに関しては、世界に様々な言語がある以上、少数の観察から決定的な結論をひきだすのはかなり危険である⁴⁾。ここで

3) この目印は要素の相互的位置関係 (*position respective*) であってもよい。ただし、目印として相互的位置関係を用いる場合、「目的」機能に述部に後続する位置を割り当て、相対的に「主辞」機能に述部に先立つ位置を与えるとすると、当然、「主辞」機能にもある種の制限が生じている。現代フランス語の場合、「目的」機能がなければ「主辞」機能の位置は必要に応じて変えられるが、「目的」機能が現れるとその自由はなくなる。

たとえば、「主辞」機能を「目的」機能の後の位置で示そうとすれば、実は「目的」機能の存在まで紛らわしくすることになる。これは「対立」(*opposition*) の代わりに「対比」(*contraste*) を用いる結果生じる限界である。なお A. MARTINET, *Éléments de linguistique générale*, § I-20 を参照。

4) たとえば日本語の場合であるが、「ガ」機能は並外れて一般的である。(どの述部も、「ガ」機能を与えられた項を受け入れるように見える。そのためだろうか、日本語の「ガ」機能を諸言語の「主辞」機能とかさねる観方がかなり一般的である。) しかし「ガ」機能と上で見た「主辞」機能との

は、とうぜん、すべての言語に「主辞」機能を想定するようなことはしない。ここでいう「主辞」機能とは、広義の「第一統辞機能」などではなく、上で定義したような狭義の「主辞」機能である。

I-2 「態」と「主辞」機能

現代フランス語の代名動詞は、その形からいえば、動詞述部に、主辞として立つ参加者自身を指す再帰代名詞を添えたものにすぎないが、その働きの範囲は狭義の再帰動詞の範囲を大幅に越える。その大きな特徴は、再帰代名詞(場合により *accusatif* または *datif* の機能をもつ)が指す参加者を、そのまま「主辞」機能をもつ項として立てる新しい道をひらいてくれる点にある。「主辞」機能が一つの項の動詞述部との特権的な関係をあらわすことは上で述べた。その機能の特権に浴する機会を、本来、*accusatif*, *datif* の機能を通じて呼び出される参加者にまで広げようというのである。その媒介者として再帰代名詞を活用しようというのである。

「主辞」機能は一定の参加者と動詞述部が述べる事態 (*procès*) を情報ゼロの関係で繋ぐ。このことは両者が、その動詞述部にとり当然の関係、わかりきった関係にあるというに等しい。いまさら何も付け加えていうことはない、誰もがよく知るとうりの関係だ、というわけである。これは論理上の陳述関係に等しい。ここで二つの項が情報ゼロの関係で繋がれるべきものだ、ということ、両者が陳述関係にあるということである。

一つの動詞述部がえらばれると自動的にこの関係がただひとつ、設定される。すでに述べたように、この関係は動詞述部の意味内容の中に〈内含〉されている。*accusatif* または *datif* の機能で呼び出される参加者は、動詞述部がそのままの状態に放置される限りこの関係の中には入る機会がない。「態」(*voix*)とは、「主辞」機能をそなえる言語の場合、動詞述部に新しい情報 (*voix_n*)を加えることによって、新しい動詞述部 (*prédicat verbal* × *voix_n*) に新しい「主辞」機能を設定させる仕組みに他ならない。

「態」は当然、「主辞」機能をもたない言語でも、広義の「第一統辞機能」を活用するために用いられる。「第一統辞機能」は、「主辞」機能とは異なった方向に統辞機能の経済性を追求し

間には様々な違いがある。まず「ガ」機能をもった項は、けっして *obligatoire* ではない。日本語の他の項と同じように、それは自由に姿を消す。当然、この項が述部との間にもつ関係は大きな情報量をもつ。この関係は、きわめて一般的であるにもかかわらず、情報量ゼロの関係たりえないのである。強意の「ハ」が関係情報を全くもたないことから、関係情報ゼロの身代わり表現として登場してくるのも、「ガ」機能(そして「ヲ」機能)がやや情報量の重い関係表現だったからであろう。「ガ」機能を頭から「主辞」機能のひとつと見なしたのでは、こういった興味ある相違点を観察するいとますら持てないのではないか。

ようにするものに他ならないから、そこでも「態」の可能性が求められて当然である⁵⁾。いずれにせよ、「態」とある種の統辞関係の活用のあいだには緊密な関係が認められる。それゆえ統辞関係(F)と態(V)の間には一定の共同作業の関係 ($F_n \times V_n$) が想定されて当然である。ここでは、そのような統辞関係と態のあいだに見られる共同作業の研究の一環として、現代フランス語における代名「態」の問題をとりあげることにする。

II-1 現代フランス語の代名動詞

現代フランス語の代名動詞の、最初の三つの型として一般に挙げられるのは、(1) 再帰的代名動詞 (Je me lève 「私が私を起こす→起き上がる」/Je me lave les mains 「私は私において [=私の] 手を洗う」)、(2) 相互的代名動詞 (Ils s'insultent 「彼らは互いに罵り合う」/Ils s'écrivent 「彼らは互いに (手紙を) 書き合う」)、(3) 受動的代名動詞 (Ce livre se vend bien 「この本はよく売れる」) である。(1)と(2)に例が二つづつ挙げているのは、よく知られているように再帰代名詞(se)にはいわゆる直接目的として働くものと間接目的として働くものがあるからである(それぞれの例で最初のものが直接目的として働く se を含み第二のものが間接目的として働く se を含んでいる)。この三つの型に、普通は第四の型、(4) 本質的代名動詞 (Il se moque de moi 「彼は私を馬鹿にしている」) が加えられる。しかしこの型は、いずれあらためて見る機会があろうが、再帰代名詞 se の働きが最初の三つとは全く異なったものである。それゆえこの型は他のものと切り離して別に扱うことにする。

この分類は具体的でそれなりにわかりやすい面をもつが、全体を説明するのにこの具体性は必ずしも有効ではない。たとえば、

Il se trouble devant une vérité. 「彼は一つの真実をまえにして混乱する」

はどの型にはいるのだろうか。よくいわれるように、もし、第三の型が、意思を持たない無生物 inanimé を主辞に想定したものであるとすると、この例をそこに加えるわけにはいかないことになる。しかしこの例は、第一の型に入れられている例とも違う。主辞に立てられているのは〈人〉であるが、第一のその他の例と違い、この例では事態 (procès) を惹起こしているのは「彼自身」ではない。(se trouble から再帰代名詞をはずしてこの文を作り直すと *Une vérité (ou Cela) le trouble* 「一つの真実が (ou そのことが) 彼を混乱させる」となるが、そのことは il se trouble という事態の作用因が彼自身にはないことを示している。) 同様のことは Il s'endort 「彼はまどろむ」などについてもいえよう。

5) 日本語でも「ガ」機能の新しい活用の場として「受動態」が用いられる。なお、マダガスカル語の「態」をかなり詳細に論じたものとして、Siméon RAJAONA, *Structure du malagache, étude des formes prédicatives*, Ambozontany, Fianarantsoa, 1972, がある。

それぞれの分類にはそれぞれの原則や目的があるものだが、上で示した従来からの分類は代名動詞そのものなりたちを分析することよりも、文脈的意味（動詞の種類や参加者の選ばれ型による）の全体を分類しようとしたものであろう。だから、そこに様々な代名動詞を区別し特徴づける内的な要因への指針を見出そうとしても無理で、文脈的意味の分析を中心とした、おおまかな用法の範囲についての全体的な指針以上のものを、我々がこの分類の中に見出すことは難しい⁶⁾。

II-2 代名動詞の「内部構造」

II-2-1 もっとも、この分類の中の第一の型、再帰的代名動詞をやや厳密に定義し直すことは不可能ではないようにおもえる。たとえば：

- (a) [*me* : accusatif] Je *me* lève 「起きる」, je *me* regarde 「自分を眺める」, je *me* lave 「自分（の顔、体）を洗う」
 / [*me* : datif] je *me* lave la figure 「自分の顔を洗う」, je *me* dis 「自分にいう」, je *m'*achète une belle voiture 「自分用によい車を買う」

の類は狭義の再帰的表現と考えるとして、

- (b) *je me* trouble 「混乱する」, *je m'*endors 「まどろむ」

の類は「狭義の再帰的表現」とは考えないことにする。

その理由としては、(b) の型に属する *je me* trouble, *je m'*endors のような表現を再帰代名詞 *me* による拡大形式と考えるとき、どの原型となっている最小発話の形式として：

je trouble..., *j'*endors...

だけでなく、

cela trouble..., *cela* endort...

6) 「相互的」代名動詞についても、*Ils se bousculent* pour sortir 「彼らは外に出ようと押し合う」では作用（力）は集団の中の他者にしかむけられないことが文脈の意味から察せられるが、*Ils se disent* 「彼らは（互いに、自分に）いう」や *Ils se regardent* dans la glace 「彼らは鏡の中で（たがいを、自分を）眺める」ではもう少し大きな文脈を考慮に入れないといずれともいいがたい。Il *se bat* courageusement 「彼は勇敢に戦う」はもはや相互的ではありえないが、もともとこの意味は相互的な *Ils se battent* から派生したもので (A. MARTINET (dir.), *Grammaire fonctionnelle du français*, 1979, § 2.40m), <複数> の文脈の中で発生した意味を <単数> の文脈に移し植えたものである。結局、<複数> の文脈があれば <作用> は自分自身に向けられるだけでなく、集団の中の他者に向けられることもある、という点が重要になってくるということだろう。

のような形式が、想定できるという点を挙げておこう。つまり：

cela trouble…

を、代名詞 *me* によって拡大し、

cela me trouble…

とした後、話者の前には更に「態」の選択の可能性が横たわっている。*Cela trouble* のような *voix active* を選ぶか、それとも *voix pronominale* を選び

Je me trouble…(devant *cela*).

とするか、である。つまり、(b) の型の言表の中には厳密に言えば「態」の選択が一回だけ多く含まれている。その意味で (a) の型の言表と (b) の型の言表とは、内的構造が違う。単純に再帰型の (a) 型の言表は拡大により再帰代名詞が一回、最小発話の形式に加わっただけであるが、(b) 型の言表にはそのうえに「態」の選択が一回加わっている。

II-2-2 もし以上のように、第一の型、再帰的代名動詞を厳密に、その内的構造により定義し直すことができれば、態の選択が加わった言表の型——以上で (b) 型の言表として見てきたもの——をそこから除外して、厳密な意味での「代名態」を一つの型として立てることができる。これは、ほぼ、従来の分類の中で、第三の型、「受動的代名動詞」とされて来たものに当たるだろう。つまり *Je me trouble devant une vérité un peu gênante* 「わたしはいささか厄介な真実を前に当惑する」のような発話は、*Ce livre se vend bien* 「この本はよく売れる」のような発話と並べられる。そしてともに、代名態という「態」の選択を一回、経ることによって成立した発話とみなしておくことができる。

それに対して従来の分類における第二の型、相互的代名動詞（注6参照）は、第一の型、再帰的代名動詞がある種の文脈の中でもつことができる文脈的意味に他ならない。いわゆる代名動詞はすべて主辞が《複数》の記号素を含む場合はいつでも相互的意味と非相互的意味の両方の可能性を内蔵しており、文脈の中でそのいずれかに向けて自然に形成される流れを誰も、とどめることができない。ということは、代名動詞の内部構造の特徴をもって、相互的意味を予測したり、非相互的意味を予測したりすることはもともと不可能であるということである。相互的意味、あるいは非相互的意味は話者が（文脈の選択により操作することであって）代名動詞の選択により操作できる要素ではないのである。それ故、代名動詞をその内的構造の特徴をもって分類しようとする場合は、第二の型は第一の型に可能な文脈的意味を示すにすぎないも

のであるから独立の内部構造を代表することができず、結局、第一の型に含まれることになる。

II-2-3 以上をまとめるなら、第一の型と第二の型が合流して〈第一群〉となり、第三の型が animé と inanimé を合わせて〈第二群〉を形成することになる：

第一群：《再帰的 et/ou 相互的》

(A)

— *me* accusatif —

- (1) Je me lève.
「自分を起こす」
- (2) Je me lave.
「自分を洗う」
- (3) Nous nous levons.
「我々は自分を・互いを起こす」
- (4) Nous nous bousculons.
「我々は押し合う」
- (5) Nous nous voyons.
「我々は会う」
- (6) Nous nous regardons.
「我々は自分を・互いを眺める」

(B)

— *me* datif —

- Je me dis.
「自分にいう」
- Je me lave les mains.
「自分の手を洗う」
- Nous nous disons.
「我々は自分に・互いにいう」
- Nous nous écrivons.
「我々は互いに書き合う」
- Nous nous lançons.
「我々は互いに投げ合う」
- Nous nous demandons.
「我々は自分に・互いに問う」

第二群：《とりわけ再帰的でも、相互的でもなく》

(A)

— *se* animé —

- (1) Il s'indigne.
「彼は憤慨する」
- (2) Il s'affole.
「彼は慌てる」
- (3) Il se prend les pieds dans…
「彼は…に足を取られる」
- (4)

(B)

— *se* inanimé —

- Le mur s'abaisse.
「塀が低くなる」
- Le jardin se développe.
「庭がひろがる」
- La vallée s'emplit de brume.
「谷は霧でいっぱいになる」
- Le ciel se dore.
「空が黄金色にかがやく」

- (5) La séance se termine.
「会がおわる」
- (6) Un point se rapporte à ceci.
「一つの点がそれに関連している」
- (7) Son caractère s'affirme plus net.
「その性格が一層はっきりする」
- (8) Là, mon souvenir se confond.
「そこで私の記憶はあやふやになる」
- (9) Les cols marins se portent ouverts.
「船員服は襟をひろげて着る」
- (10) Ceci se passe souvent.
「これはよく起きる」
- (11) La cravate se déchire.
「ネクタイが裂ける」
- (12) La félicité du ciel se mêle à…
「天国の至福がそこにまじる」
- (13) Son âme s'écoule.
「彼のこころがほとぼしり出る」

* 以上に示したのは、ある小説の中の約20ページ中にあらわれた該当する例のすべてである。(頻度の差が参考になる)

II-2-4 さて、この辺りで、第一群、第二群をささえている〈話者の選択の構造〉をもう一度よく見ておこう。

これまでの我々の分析では、第二群の発話形式は代名態という「態」の選択を含み、その意味で第一群の発話形式にくらべて、選択の数が一つだけ多かった。だが、**Cela le trouble**「そのことが彼をを混乱させる」と **Il se trouble (devant cela)**「(そのことを前にして)彼は混乱する」を綿密に比較してみると、発話形式の基本構造には (**devant cela**) の部分は加えるべきではないから⁷⁾、基本構造そのものは **Il se trouble…**の方が数段軽量化されている。その根本理

7) (**devant cela**) は文の必携の構造には属しておらず、随意的の拡大部分として、文脈の中にそれに代わる情報があればいつでも省略できる。つまり、この部分のかわりに、いつでも文脈に依存できる仕組みになっているのである。celaあるいはそのかわりに現れるもっと重い情報は、場合によっては是非、必要なものとなるが、それをこのように、文の成立そのものとは無関係なところで追いやることで、文の基本構造そのものは大いに軽量化できる。

由は、主辞の位置から *cela* を除去し、代わりに目的辞と主辞を埋める内容を完全に反復的な選択による内容に変えたところにある。

第一章でも述べたように様々な「態」のねらいは「主辞」機能の活用にあると考えられるが、代名態の特徴は「主辞」機能の項と「目的」機能の項を埋める要素を反復的にし、しかも、何らかの別の要素ではなくその要素を、「主辞」機能（情報量ゼロの機能である）とともに選択させるところにある。

このようにして得られる発話形式は、「目的」機能の項を埋める要素に全面的に話者の注意を集中させることを許す。その要素を主辞に立て、もともと主辞の位置にあった要素を随意的に要素として基本構造の外に追いやるのである。この点は上で引用した少数の例を見ることによっても納得がいこう。

以上のことを考慮に入れるなら、「代名態」の選択は話者に重荷をしいるところか、むしろ話者の仕事を大いにたすけてくれると言えよう。この形式は、通時論的には、上で見た第二群が体系の中に成立した後に話者の利用に供されることになるが、それと共に第一群のもつ意味も変わったはずである。第一群はそれまで、ごくかぎられた範囲で、すでに「代名態」とほぼ同じ形式の選択を話者に許していた。代名態の登場は、まさにその形式を、もっと広範囲に適用できるようにするためのものであった。広範囲の適用が可能になったこの形式は、実質はそれまでどうりでも、それがもつ意味と重要性をまったく変えたのである。それとともに第一群は、この新しい意味合いの中にあらためてもう一度、組み込まれることになる。こうして、第二群が成立したあと第一群は、そこで広範囲に用いられるようになった「代名態」の周辺的な一部として再編、吸収されることになる。

III 結論にかえて

「態」と統辞機能の共同作業は言語体系の経済性に対して重大な意味をもつと考えられる。その体系で最も頻度の高い統辞機能（「主辞」機能をもつ体系では「主辞」機能）を中心に表現ありかたを組み変えるのが「態」の大きな仕事であると考えられるからである。ここで扱ったのは現代フランス語における「代名態」（いわゆる「本質的」代名動詞をのぞく代名動詞）の問題である。いわゆる本質的代名動詞の問題にはここではふれなかった。いずれ機会を見て論じてみたい。

我々が以上で見てきたところでは、再帰的代名動詞は「代名態」の周辺的な一部であり、「代名態」はむしろ、従来の呼び名でいえば、いわゆる「受動的」代名動詞を中心に成立していると考えられる。「目的」機能 (*fonction accusative*) を担う項に焦点が合わされ、そこにあらわれる要素を文の主辞として押し出す基本形式は、いわゆる「受動的」代名動詞と共に成立し

ているからである。この型には、あまり問題にされることがないが *se datif* のあらわれる可能性がある (*Le fait s'est donné depuis longtemps une interprétation amusante* 「この事実には昔からおかしな解釈が与えられてきた」)。つまりフランス語の通常の「受動表現」より構造的に幅がひろいのである。それだけにフランス語の文脈で「受動的」というこの呼び名が適切であるかどうかは疑問である。だが、名前の問題はさておき、現代フランス語の代名態の中心がこの型によって構成されていることは記憶されてよい。

小論ではこの型を〈第二群〉として扱い、その内部構造、それをささえている話者の選択、そしてこの型が体系の経済性にどのように寄与しているかを見た。この型においては、再帰代名詞は要素の再帰的の反復をしるしづけるために付加されるのではない。主辞の位置（主辞機能をもつ項の現れる場所）がその要素によってあらためて利用できるようにするために現れるのである： $(on) + vend + (le\ livre)_{obj.} \rightarrow (le\ livre)_{suj.} + SE\ vend.$ その点は次の文においてもまったく変わるところがない： $(cela) + (le)_{obj.} + trouble \rightarrow (il)_{suj.} + SE\ trouble.$

Le rôle de la voix pronominale

par Yoshiro WATASE

Ce qu'on appelle la "voix" en syntaxe nous semble être un procédé nous permettant de tirer le plus de profit de la fonction syntaxique *la plus usuelle* (dont, par exemple, la fonction sujet) *dans le système considéré*. Dans les langues munies de fonction sujet, c'est-à-dire de celle représentant la relation entre un terme de présence obligatoire autour du noyau prédicatif et ce noyau prédicatif lui-même, la "voix" nous sert à convertir un des termes à fonctions non-sujet en terme à fonction sujet. En ce qui concerne la voix *pronominale* en français moderne, c'est la classe pronominale *réfléchie*, en fonction *accusative* ou *dative*, qui tient le rôle de "relais": le participant *accusatif* ou *datif*—y correspondant—autour d'un noyau prédicatif sera converti en fonction sujet (avec plus ou moins de nuance *imperfective*, bien entendu), dès le moment où ce dernier noyau sera muni d'un élément pronominal réfléchi. On trouve ainsi le moyen de placer un élément doué de fonction accusative ou dative, à l'origine, au centre de l'ensemble de divers participants prévus autour d'un noyau prédicatif. Il est à noter qu'en français moderne, le participant originellement en fonction *dative* n'a pas la chance de figurer à la place du sujet de la phrase en voix *passive* (donc, forcément, avec plus ou moins de nuance *perfective*). En jouant ce rôle de relais, la classe pronominale *réfléchie* s'y ajoute, non pas pour marquer la participation répétitive et de façon *réfléchie* de l'élément au procès, mais pour rendre disponible l'assiette-sujet (la place d'un terme à fonction sujet) pour cet élément-là: *(on) vend + (le livre)_{obj.} → (le livre)_{suj.} + SE vend*. C'est peut-être le point essentiel qu'on ne peut pas oublier pour comprendre la vraie nature de la voix pronominale et on ne trouve rien d'autre schéma syntaxique dans *(cela) + (le)_{obj.} + trouble → (il)_{suj.} + SE trouble + (devant cela)*.